

巻頭言—「誇り」と「使命感」、 そして「一体感」を!?!—

日本経済は景気回復の状態にあるようで、それは2020年の東京五輪まで続き、戦後最長期間を更新する見通しだといわれています。そして採用状況は全体的に見れば「売り手市場」で、新卒者の就職率はとても高い水準になっています。

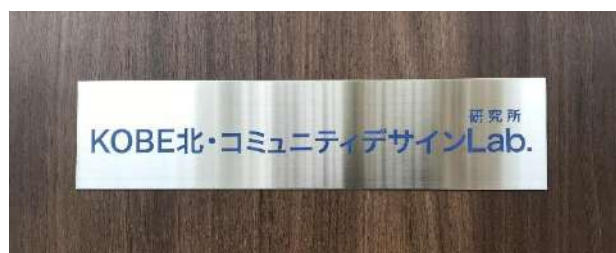
しかし、実は大企業はいまも昔も「超・買い手市場」なので、「売り手市場」とはいても、企業の規模や業種により異なります。リクルートワークス研究所の調査では、2018年の大卒の求人倍率は従業員300人未満では6.45倍であった（1人につき6.45倍の求人があった）のに対して、5000人以上では0.39倍（1人につき0.39倍の求人しかない状況）であったとのこと。つまり大手企業では1つの求人を2.5人が争っていたこととなります。残念ながら、福祉業界では、不人気なので求人難が続いています。「KCDラボ」では、こうした業界の底上げを目標のひとつにしています。

ところで景気回復の影響を受けていない業種のひとつが出版業界です。出版市場を調査・研究する出版科学研究所によれば、2017年の書籍・雑誌販売額が前年比7%減で、2015年の5.3%を上回り、過去最大になったとのこと。

しかし、村上春樹とか、東野圭吾とか、角田光代とか…とてもよく売れている作家もいます。2013年のTVドラマで最終回の視聴率が42.2%と大ヒットした『半沢直樹』（小説では『オレたちバブル入行組』と『オレたち花のバブル組』など）の池井戸潤もそのひとりです。名台詞「やられたらやり返す、倍返しだ！」（半沢直樹）と「やれるもんならやってみな」（大和田常務）の応酬は、いまでも記憶に残っていますよね。

池井戸潤作品は、よくTVドラマ化されていて、『半沢直樹』と似た理不尽な状況と対決するというストーリーでは、『花咲舞が黙ってない』も有名ですね。このほか『下町ロケット』や『ルーズヴェルトゲーム』、今春放送されていた『陸王』、そして映画化され、ちょうど本日（6月15日）公開される『空飛ぶタイヤ』もとてもいい作品です。

池井戸作品がなぜ人気なのか？ 勸善懲惡、巨悪に立ち向かう、困難な状況にもめげずに正義を貫く、痛快…と、いろいろあると思います。そこにはいくつかのメッセージのバ



KCDラボ扉

ターンがありますが、『下町ロケット』や『陸王』、『空飛ぶタイヤ』などに共通しているのは、中小零細企業なり町工場の社長とその社員たちが力を合わせて理不尽な大企業に挑むというものです。

そこには中小企業や町工場としての「誇り」や「使命感」、そして会社や工場全体の「一体感」があります。昭和の匂いがするこうしたストーリーが、一定の読者を得て、視聴率を稼ぐということは、実は現代人がそうした古風なものを求めているのだとも解釈できます。

仕事の価値は、単に収入や待遇だけでは測れません。その仕事にやり甲斐があり、その仕事に打ち込むことで自らが成長しているという実感がもて、その仕事を通じて他者との確かな信頼関係が形成されて…。そんな仕事であれば、きっと「誇り」や「使命感」が湧いてきて、仕事を通じた仲間との「一体感」ができてくるのではないかと思います。

福祉の仕事がそのような仕事だということに、いま、この仕事に従事している人たちが“実感”できるようになるためにも、まずは陽気会がそのような職場にならなくてははいけないと思います。それは「KCDラボ」としての課題でもあります。

KCDラボ代表 松端克文



ラボ室内

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：福祉の“専門性”について

社会福祉（以下、福祉とする）は、生活していく上で困難な状況に置かれている人（たち）を支援するための社会的な取り組みの総称である。

医者なら病気を患っている人（＝患者）を治療するところにその専門性があるし、弁護士ならクライアントの立場に立って法的な問題を解決していくところにその専門性を見出すことができる。

しかし、福祉の場合は、対象が曖昧だし、生活上の困難に対する解決の仕方も、病気が治るとか、法的な問題がクリアになるといったことに比べると、やはり曖昧である。そこで順番にじっくりと考えてみることにする。

まず、「生活していく上で困難な状況に置かれている人（たち）」というのは、特定の人（たち）を指しているわけではない。たとえば、ついつい「障害者」を社会福祉の対象として一律に捉えがちだが、厳密にいえばそういうわけではない。「障害」があっても、生活をしていく上で、特に支障がなければ、わざわざ「障害者」と認定して、福祉の対象にする必要はない。農林水産業やモノづくりが主たる産業であった時代には、今日のサービス産業が中心で、過剰に「コミュニケーション能力」が重視される状況と比べれば、「障害」がマイナスの要因として際立つことは少なかったといえる。

つまり、福祉の対象となるのは、「障害者」とか「高齢者」、「貧困者」というように、何らかの属性をもった固定的な人（たち）ではなく、その人にとっての社会関係がうまく結ばなくなった状態の人（たち）なのである。

「車いすの天才物理学者」として知られ、独自の宇宙理論を構築してきたイギリスのスティーブン・ホーキング博士が、今年の3月14日に76歳で亡くなった。ホーキング博士には、筋萎縮性側索硬化症（ALS）という障害があったが、「障害者」としてではなく、科学者や物理学者として活躍し、注目されてきた。1988年に刊行された『ホーキング、宇宙を語る一：ビッグバンからブラックホールまで一』は、世界中で1,000万部以上のベストセラーになっている（ホーキング博士の理論や名言は示唆に富んでいるので、また別の機会に紹介する）。

こうしたことをふまえると、「障害」があるから問題なのではなく、仕事に就けないとか、収入がないとか…というように、社会関係がうまく形成できないことが問題なのである。福祉はこのように「生活上の困難」を社会関係のなかで捉えるところに特徴がある。

次に「環境（状況）のなかの人」という捉え方も重要となる。人はこの世に生を受けた瞬間から、すでに環境のなかで置かれている。そして環境との相互作用のなかで人が人として成長しながら生活を送ることになる。

性格が明るい人というのは、そうでない人との比較におい

て、そういう人だと認識される。勉強にしても、スポーツにしても「できる／できない」は相対的である。ある学校でとてもよくできる子どもが、別の集団に入れば、さほど目立たなくなるといえることは、よくある話である。

また、たとえばある人が「明るい」と認識される場合、それはその人が明るくふるまえる環境にいるということでもある。だから、いくら明るい人でも、周囲から無視されているのに、明るくふるまい続けることはできない。

このように福祉では、「環境のなかの人」という観点を重視する。そしてその観点を、具体的な支援（ソーシャルワーク）においても重視している。つまり、個人にはたらきかけると同時に、環境にもはたらきかけ、その人がより暮らしていきやすくなるように環境を調整するのである。

環境が変われば、人は変わる!?

福祉の強みは、この環境へのはたらきかけにある。ある利用者を「激しいこだわりがある」と見るのか、「集中力がある」とか「几帳面である」というように見るのかは、どちらが正しいともいえない。一般的に、そうした特徴を「問題行動」として捉えがちだということである。だから、「激しいこだわり」が周囲からみると気にならないとか、それを活かすことができるような環境にできれば、本人にとっても、周囲の人たちにとっても幸せなことである。だからこそ、実践現場でのそうした方法論の蓄積が必要なのである。

そして福祉の専門性のポイントは、とことん本人の側から考え、寄り添い続けるという点にある。支援の場面では、ついつい支援者目線でその人を捉えてしまう傾向がある。一見わがままに見える言動も、その人の置かれている状況に自らも身を委ねてみるような共感的な姿勢で捉え直せば、その言動の意味が見えてくるかもしれない。大切なことは、その人の内面が理解できるようになることというよりも（そうできればいいけれど…）、その人に寄り添い続けることである。

人は他者との関係を通じて、自己のありようが左右される。他者との関係が険悪になれば、自分自身も精神的に不安定になるし、逆に他者との関係が良好であれば、自身も安定する。支援において大切なことは、こうした安定的な関係をいかに形成できるかである。

福祉専門職として、その人が自己を安定させることができるような他者として関わることができているのか？

こうしたことを自問自答し、その人にしっかりと寄り添い、その人にとってよりよい社会関係が形成できるように環境を調整していく。福祉の専門性は、こうした実践を積み重ねることのなかにあるといえる。 KCD ラボ代表 松端克文

（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

* 毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

～新事業所紹介～

サニーサイド宮崎 レクリエーション保養所事業

サニーサイド宮崎は、2012年9月から宮崎県小林市で開所している定員20名の就労継続支援B型事業所です。今回は小林市の隣市、えびの市で始めることになった「サニーサイド宮崎レクリエーション保養所事業」について紹介します。宮崎県の南西部に位置するえびの市は「日本の米づくり百選」に選ばれ、豊かな湧き水と昼夜の気温差によりできる美味しい米と肉、澄みきった夜空に輝く星、綺麗な水の側で光を放つ蛍など、霧島山系の恵みが巡る温泉と四季の町です。

この度、開設したレクリエーション保養所事業は、温泉付き戸建て住宅を改修しており、①法人施設利用者や一般障害児者と家族のグループ旅行、②幼児・児童と家族の野外体験の場、③職員や施設関係者の研修・福利厚生施設などに利用していく予定で、清掃・利用客の接待・ベッドメイキングなどに関しましては、サニーサイド宮崎の利用者と職員が就労作業として担います。

この魅力は、なんといっても浴槽から壁に至るまで檜を全面に使った掛け流し温泉と霧島山系を眺めながら浸かる足湯。設計者と施工者のアイデアが詰まっています。そして“食”。宮崎の太陽をたくさん浴びた完熟野菜と肉を使ったバーベキュー、サニーサイド宮崎の養鶏事業で採れる放し飼い有精卵を使った卵かけご飯。えびの市は、熊本県、鹿児島県との県境にあり、三県をまたがった観光プランも用意しています。自然豊かな九州でゆったりと充実した時間を過ごしていただけるようにしたいと思っています。

(よろこび荘施設長兼サニーサイド宮崎事業担当・池田哲史)

みのたに園短期入所事業所



2018年6月1日付で神戸市より指定を受け、『みのたに園短期入所事業所(単独型)』を開設しました。短期入所のニーズは以前よりあり、2013年3月より4年ほどの間、近隣のマンションの1室で、3名定員の単独型ショートステイを実施していたのですが、スプリンクラーの設置義務化が規定された消防法の改正などにより、いったん休止していました。しかし、利用されていた方々からは再開を望む声が多く寄せられていました。

そこでこのたび、1年あまりの準備期間を経て、新たに開設することにしました。定員は5名。場所は北区筑紫が丘5丁目、みのたに園からは3kmほどの距離にあり、閑静な住宅街の一軒家です。一般の住宅仕様なので、利用者の方には家庭的な雰囲気のなかで過ごしていただける場所です。夜間はここで泊まっても、日中はいつも通りみのたに園で過ごすという普段のリズムを崩すことなく利用していただけます。

緊急時に利用していただく、という本来の役割を果たしつつ、利用者の将来を見据えて、ここを活用して、調理や片づけ、近所とのお付き合いなど、地域で暮らしていく上で大切なことが体験的に身につくような取り組みができればと考えています。

みなさんに泊まってみたいと思っただけのような事業展開を目指して、スタッフ一同がんばります。

(みのたに園サービス管理責任者・灰谷宏美)



外観



ひのき風呂

施設長リレーインタビュー

グループホームと就労継続支援B型事業所サニーサイド神戸の、所長である澤村友也氏にお話を伺いました。

—まず、グループホームとサニーサイド神戸の担っている役割とは、どのようなものでしょうか？

一言で言えば、「生活の場の提供」と「働く場の提供」です。利用者の方が安心、安全で生きがいを感じる生活を送れるようにするにはどのようなサポートが必要か、職員と共に日々模索しています。

当法人のグループホームの場合は、大半の利用者の方が同じ法人内の事業所（サニーサイド神戸）を利用されています。しかし、別の就労継続支援B型事業所や一般企業へ通われている方もいらっしゃいますので、各関係機関との連携（連絡調整）を密にすることを心がけています。

—現状の課題があれば、教えてください。

サニーサイド神戸から言えば、就労に向けての取り組みが必要な方と余暇的な作業を望まれている方が混在していることです。最近では外での作業に力を入れ、当事業所で作った農作物や花の苗を地域の方に向けてお店に出荷したり、自治会のイベント等に参加したり、販売をさせていただけるようになりました。利用者の方も直接お客さんと接することによって、自分たちの作った商品に誇りをもてるようになり、励みになっているようです。しかし、一般就労に向けての取り組みは他の事業所や就労センターの紹介を通じて行っており、当事業所の独自の取り組みができていないのが現状です。一般就労を希望する利用者の方が本当にやりたい仕事は何なのか、どうすればその夢が叶えられるのか、職員で話し合い、今年度はサニーサイド神戸独自の取り組みをしていく予定です。また、余暇的な作業を好まれる方、屋外作業が苦手な方には室内の作業を提供しています。しかし、いろいろと作業は取り入れているのですが、利用者のニーズと企業の求める質と生産量および対価が合わず、悪戦苦闘の毎日です。ぜひ室内向けの作業があれば紹介してくださいね（笑）。

グループホームでは65歳問題ですね。当グループホーム事業所ができて一番長い事業所では約20年が経過し、グループホームの周辺を利用者の方と一緒に歩いていると「こんにちは」「元気？」などと気さくに話しかけてくださる地域の方がたくさんいます。楽しそうに話す利用者の方を見ると、この地域で彼・彼女らは「地元の人」なんだと改めて思い、嬉しい気持ちになります。しかし、65歳になると身体機能が低下し、施設入所に戻りたいと思っても、入所施設の満床の問題、制度上の問題などがあり、なかなか戻れないのが現状です。今後、65歳になる前にご利用者本人、ご家族に改めて制度の説明をし、入所施設に戻るか、第2の地元であるグループホームで生活を続けるか、選択していただく必要があります。私としては、ご本人はもちろんのこと、ご家族の方と

も十分話し合い、協議したうえで、その利用者さんらしい生活を送れるよう職員一同サポートさせていただきたいと思っています。

—今後のビジョンをお聞かせください。

当法人のグループホームやサニーサイド神戸という事業所が、陽気会やおかば学園と同じくらい、もしくはもっと認識されたいというか、ネームバリューがほしいですね（笑）。

もちろんすぐに結果が出るとは思わないですが、そのくらいの気持ちで仕事をしないといけないと思っています。うちの利用者さんと職員で作っている農作物や花の苗には、それくらいの自信がありますし、その利用者さんの生活を支えているグループホームもすごくアットホームで和やかな雰囲気だと自信をもって言えます。

—ネームバリューと言いますと、昨年、サニーサイド神戸の利用者さんと職員で栽培したジャガイモを使った漬け床を販売していることが話題となり、神戸新聞やラジオ関西の取材を受けたと伺ったのですが…。



はい、取材を受けさせていただきました（笑）。サニーサイド神戸では、2年前から「農福連携プロジェクト」をスタートし、販売に向かない小さなジャガイモなどを有効利用する漬け床を開発しました。その名も「神戸初産しっとり漬け床」です。米ぬかのぬか床のような臭いがなく、ほんのり甘い香りがあるのが特徴で、米ぬかが苦手な人やアレルギーの人には特におすすめです。毎週金曜の午後に陽気会事務所前、また、神戸市北区の農産物直売所「はっばや神戸 野菜ごはん」やドラッグストアのウエルシア薬局神戸西山店（木曜のみ）で販売しているので、ぜひ買いに来てくださいね（笑）。

—商売上手ですね（笑）。

ありがとうございます（笑）。こういった媒体を通じて、少しでも多くの方に事業所名を知っていただけると嬉しいですね。いずれにせよ、うちの利用者さんが「えっ、あの事業所の人なんや！すごいやん!!」って言われる日がくるよう、職員と力を合わせてがんばっていきたいと思います。

—活動的でエネルギーが豊富な澤村氏。その労を惜しまない働きぶりが実り、事業所名を世間に轟かせる日がくるのも近いのではないのでしょうか。今日はお忙しいところありがとうございました。（真）

教えてください！専門職 ～PT編～

◆ PTとは…“Physical Therapist”の略！！

PTは、「Physical（身体）」にアプローチする、“動作の専門家”です。寝返る、起き上がる、座る、立ち上がる、歩くなど、日常生活を行うためにまず必要となる基本的動作能力の向上や改善を目指します。具体的には、関節可動域の拡大、筋力の強化、麻痺の回復、痛みの軽減を図り、動作練習や歩行練習を行うことで、よりよい日常生活が送れるように支援をするリハビリテーションの専門職です。

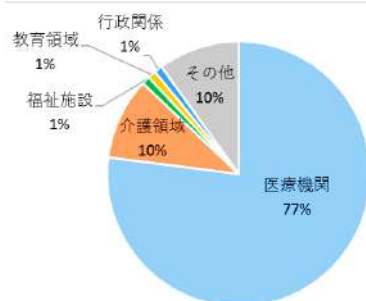
◆ PTとOTはどう違うの？

OTとは、Occupational Therapist(作業療法士)の略です。PTで対象としていた“座る、立つ、歩く”などの基本動作の先にある、座って“食事をする”、立って“家事をする”、歩いて“仕事に行く”など、より応用的な動作、また社会的な活動を対象とし、リハビリを行うのがOTです。

実際にはPTとOTの職域に完全な区別があるわけではなく、対象となる方の掲げたひとつの目標に向かってそれぞれの視点でリハビリを進めていきます。「調理」を例に挙げると、PTは作業をするための姿勢を整える、作業時間中に必要な筋力や持久力をつけるなど活動の土台を作り、その上でOTは、包丁で切る、食材をつまむなどの細かい動作を練習します。PTとOTで協同リハビリを行うことで「食事を作る」というその人の役割の獲得に繋げていきます。

◆ PTって主にどこで働いてるの？

グラフに示す通り、医療機関(病院)で働くセラピストが一番多いです。私たちも昨年度までは、それぞれ病院で働いていました。教育領域・福祉施設領域で働くセラピストは、わずか1%！今回私たちも改めて調べてみて、驚きました(笑)。



◆ 具体的にはどんなことをしてるの？

例えば…を症例で紹介します！

(病院のPT編) 脳梗塞にて、右片麻痺が残った58歳女性

家に帰るためには、玄関の前に段差が…。日中は夫も仕事のため、トイレも一人で行けない！家事もしなければ！
⇒ここで！PTは、3か月間毎日リハビリを施行します。状態が落ち着くと、ベッドから起きる練習開始！まずは可能な限り、麻痺の回復を目指します。そして固まらないよう関節を動かし、筋肉の状態を整え、動作練習(歩く、段差昇降など)、日常生活動作練習(トイレなど)、料理動作(主にOTが介入)など、必要な動作に対し介入します。

どうしても介助が必要な場合は、介護サービス(訪問・通所サービスなど)を提案したり、自宅へ訪問し手すりの位置を

検討(物的介助)したり、環境面へもアプローチします。

また脳梗塞では、言語にも後遺症が残ることがあるため、STとも連携し、PT/OT/STのリハビリチームで、患者さまをフォローします。もちろん、DrやNs、相談員、患者さま、ご家族さま含めた“チーム医療”で、患者さまを支援します。

(病院のPT～小児編～) 脳性まひの7歳の男の子

大好きなアニメを観たいのに、頭や手足が意志に反して動いてしまい(不随意運動)、顔をテレビの方に向けていられない…。また舌根沈下といって、首や胸周りの筋肉の働きが弱く偏るために舌が喉の奥に落ち込み、呼吸がしづらい。

⇒まずは気道確保の姿勢で、楽に呼吸ができるようにアプローチ。首周りの筋肉を、少しでも自力でコントロールできるよう、うつ伏せにて好きな動画を見ながら、頭を持ち上げる練習をしたり…。はたまた、偏った筋肉の使い方で、固く短くなった筋をストレッチしたり…。

介入のなかで、お母さんと密にお話する機会も多くあります。また学校の先生が見学に来てくださったり、PTが学校へ見学に行ったりと、連携を図ることもあります。

いずれもほんの一例ですが、病院では基本的に1対1、主に在宅復帰や社会復帰を目指し、また子どもの場合は、発達の手助けをするような介入を中心に行っています。

◆ 陽気会のPTとして…

現在は療育に入りながら、児童発達支援センターと放課後等デイサービスにおいて、個別の身体評価を実施しています。その評価をもとに、今後は動作や作業につながる身体の土台作りなど、子どもの発達過程において支援をしていきます。

また、幅広い年齢層の利用者の方に対し、それぞれの時期に必要な経験の促しや二次障害・廃用の予防、二次障害に対する機能維持・改善など、少しずつ介入の幅を広げていきたいと考えています。

私たちは、まだまだ未開拓な福祉分野で働くセラピストとして、専門性を生かし、それぞれの職種の方と協力しながら、障害という特性をもって生きること、向き合っていきたいと思っています。

PT：笠原、瀧川



笠原PT、瀧川PT

ますますのご活躍を期待しています！ (編集委員会)

ちょっといいですか？大西ですけど…

—福祉職人がもつべき心—

◆感謝の気持ちをもつこと

「福祉に携わる人がもつべき基本の精神は何だと思えますか？」よくこのような質問を受けます。優しさとか、思いやりとか…答えは、たくさんありますが、そのなかでも最も大切なのは、「感謝の心」ではないかと思えます。日々、感謝の気持ちをどれだけもつことができるか、ということが福祉職人としての資質を左右していくことになるのではないのでしょうか。

感謝とは、今の自分「以外」のヒトやモノやコトに対する感情です。必ず相手があります。相手に感謝をしようと思えば、当然、相手の存在を認め、相手の良いところに気づき、それが自分にとってありがたい存在であることを認識するという過程が必要です。この過程をふまない感謝は、社交辞令、よいしょ、最悪は偽善と呼ばれてしまいます。自己中心的な考え方からは、感謝の気持ちが生まれることはありません。

福祉業界が得意とする「相手を思いやる気持ち」というのも、見方を変えればこの「感謝の気持ち」とつながっていくのではないのでしょうか。

◆感謝しながら生きること

で、人に感謝できるようになれば、人からの言動を感謝の気持ちで受け止めることができるようになります。そして、人から感謝されるような人になっていくことができます。もし、自分の資質について迷うようなときがあれば、ありがとうと言った（思えた）数と、ありがとうと言われた（思ってもらった）数を、毎日数えてみるのもいいかもしれません。

このような理屈から考えると、私たちが日々向き合う利用者に対して、常に感謝の気持ちを抱いていれば、利用者も、明るく楽しい気持ちになります。不適応行動がなくなる…というところまでは難しいかもしれませんが、で、施設の雰囲気自体が変わってくるのではないかと思います。虐待という言葉とは無縁の施設に変えていくことができるのではないのでしょうか。

職員の人材育成やチームワークとかいう課題についても、「この感謝する、感謝される」という関係を基本に考えていけば、いい対応策が見つかるかもしれません。感謝しながら、感謝されながら人は人のなかで生きていくのだと思います。

近年、この業界からは、制度の変革とともに、「感謝」という言葉が忘れられていっているような気がします。人を幸せにする役割を担っている福祉職人だからこそ、「感謝の心>不満の心」となるような毎日であり続けたいと思います。（大）



陽気会は創立 60 周年を迎えます

陽気会は、知的障害児施設おかば学園を開所してから 2018 年 9 月 1 日で 60 周年を迎えます。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、みなさまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です
施設・事業所サポーター 年間 10,000 円
個人サポーター 年間 1,000 円
詳細は別紙をご覧ください

編集委員会：松端 克文(KCD ラボ代表)
朝日 満子(KCD ラボマネージャー)
松端 真美(KCD ラボスタッフ)
大西 博之(法人本部長)

〒651-1313
神戸市北区有野中町 2-5-19
社会福祉法人陽気会
KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.
Tel：078 (981) 7271
Fax：078 (981) 0825
HP：http://youkikai.or.jp/
Email：kcdlab@youkikai.or.jp

